



林業のエキスパートとして
シイタケ、茶、林業と「農林複合経営」を営む森下一淑さん。大井川地区林業研究会会長や県林業研究会副会長を歴任する林業分野のエキスパートだ。平成8年には地域の仲間7人とともにウッドクラフト中川根を結成。伐採から搬出、簡易製材まで共同で作業するなど、先進的な活動が注目されている。

一淑さんは県立林業短期大学卒業後、家業である林業を継いだ。「最初は『自分がやらなければ』という気持ちが強かったように思いま

林業を通して「森づくり」を実践
次代を担う後継者の育成にも心血注ぐ
森の名手・名人に認定された

森下一淑さん(文沢)

森の名手・名人 (森づくり部門【架線集材】)

もりしたかずよし
平成8から9年に大井川地区林業研究会会長、10から11年に県林業研究会副会長。ウッドクラフト中川根やFSC認証グループE-net大井川の主力メンバーとしても精力的に活動中。平成19年、県林業指導者の知事認定を受け、後進の指導にも力を注いでいる。町林業振興対策協議会委員。

す。林業に30年以上携わってきましたが、最近ようやく、その面白さや魅力が分かってきたような気がします」とほほ笑む。

「林業」と一口に言っても、その奥は限りなく深い。木の倒し方一つとっても、何通りもの方法がある。「ロープを使う方法、くさびを打つ方法、器具を使う方法など、木の太さや場所に依じて使い分けます。自分が思ったとおりに木を倒せたときは、本当に気持ちがいいものです」。架線集材(ワイヤーロープを用いた集材)技術に高い評価を得る一淑さん。この地域だからこそ、こだわ

らなければならぬ技術だと言う。「この地域は、天竜や静岡に比べて林道や作業道が少ないんです。急峻な地形が多いため仕方がないことなんです。だからこそ架線による集材が重要なんです。先輩方から受け継いだ技術や知識を、今度はわたしたちが次に伝えなければならぬ。今の林業従事者が担う役割だと思っています。そういった義務感や使命感みたいなものは常にありますね」。

毎日が勉強と工夫姿勢
お茶の仕事が一段落した9〜10月ごろから山仕事は本格的なシーズンを迎える。間伐などは冬場が主。寒いなんて言ってはられない。「山仕事はきつい、危険が伴うなど、マイナスのイメージがつきもの。でも幸いなことに、ここには同じ仕事をやる仲間が何人もいるし、経験豊富な先輩方もいます。お互いに支え合って仕事ができることに幸せを感じています」。

この道30年。ベテランの域に達した一淑さんだが、「いまだに思い通りにならないことも、失敗することも多い。だからこそ毎日が勉強です」と力強く言い切った。「これから、これまでと変わらない気持ちと使命感を持って励んでいきたいですね」と語る一淑さん。木の成長を見つめる目は、限りなく優しくなった。

森の名手・名人…「もりのくに・にっぽん運動」のリーディングプロジェクト。森づくり、森の恵み、加工、森の伝承・文化の部門ですぐれた技を持つ達人を全国から選定。㈱国土緑化推進機構の事業。本年度は全国81人、県4人を選出。うち2人が本町の達人。

茶箱に生まれた可能性

金づちを打つ音が、昔ながらの工場に響き渡る。地元産材で茶箱を作り続ける前田製函所にお邪魔した。「実は、最近では『茶箱』としての需要はほとんどないんですよ」と宥さんは言う。

中学校卒業後、製函の道に進んだ宥さんは、父親とともに前田製函所の屋台骨を支えた。しかし、昭和50年代後半に差しかかると、軽くて安価な段ボール箱が茶の運搬・保管に用いられるようになり、木製の茶箱は、次第に姿を消していった。

55年間、休むことなく作り続けた茶箱
地元産材にこだわった、一級の「工芸品」
森の名手・名人に認定された

前田宥さん(下長尾)

森の名手・名人 (加工部門【茶箱づくり】)

まえだひろし
前田製函所代表。駿遠茶箱製函組合(島田、藤枝、川根、森、掛川、大東の各市町の茶箱製造所で組織)の副理事長を平成18年から今年まで務める。前田製函所で製造された茶箱は、主に「インテリア茶箱クラブ」へ出荷され、そこで装飾が施されるという。

最盛期には、この地域に20軒あった茶箱製造所は、現在では国内に7軒しか残っていないという。転機が訪れたのは20年ほど前。茶箱の表面に、布地やクッションなどを張り、寶石箱や衣装箱、物入れを兼ねたスツールなど、インテリア用品として活用する団体が現れた。茶箱に新たな需要が生まれたのだ。

この「装飾を施した茶箱」は、特に海外から高く評価されたという。元来の保存性の良さに加え、美しい外装が人気を呼び、重宝された。「シカゴに2千個送ったこともあるんですよ。今でもドイツなど各国で

使われています。『茶箱』ですから、お茶を入れるために使ってくれたらそれが一番ですが、別の使い道が生まれ、実際に使ってくれる人がいることは本当にありがたいことです」。

品質の高さが顧客の信頼に
茶箱は、洋服が入る大きなものから、宝石をしまう小さなもの、椅子として使える正方形のものまで、ニーズに合わせたラインナップの豊富さが自慢だ。品質へのこだわりも半端ではない。茶箱に使われるスギ材は、大井川中流域で伐採された地元産材。山主や伐採業者から直接買い付ける。仕入れたスギ材は板に挽いた後、2カ月かけて天然(自然)乾燥させるという徹底ぶりだ。

「今では単なる保管用の箱ではなく、『工芸品』としての価値が見いだされました。それだけに寸法や品質はおろそかにできないんです」。茶箱にかける誇りが品質の高さを生み、顧客の信頼へとつながっているのだらう。需要の低迷に嘆くことなく、地道に作り続けたことで新たな可能性が生み出された茶箱。

宥さんは言う。「海外に目を向ければまだまだ未知数。輸送方法などの課題はありますが、それでも可能性は無限だと思えます」。

その視線の先には、果てしなく広がる世界があった。



インテリア茶箱…木材の素材そのままの表面に布地やクッションなどを張ることで、部屋の中に自然に置いておけるインテリア用品に変身する。箱の中には薄い鉄板が張られており、防湿・防虫などの効果が高い。この装飾は外国人が始めたという。



ここにも、一つの物語。
広報かわねほんちょう